近世前半期における片仮名の仮名遣い

山口　倫香

一　本稿の目的

平仮名の仮名遣い研究は、定家仮名遣いや歴史的仮名遣いを中心としながら現在に至るまで活発に行われているのに対し、片仮名の仮名遣いの研究は少ない。さらに、各写本・刊本内部の仮名遣いに関する研究が中心であり、その時代を網羅した片仮名の仮名遣いの研究は少ない。[1]

そこで、本稿では片仮名の仮名遣いについて、『和字正濫鈔』（一六九三年）を基準として、その成立前後の片仮名の仮名遣いと、平仮名の仮名遣いを比較・検討する。そして、近世前半期に通用の片仮名の仮名遣いが存在するのか、平仮名の仮名遣いとどのように異なるのか明らかにすることを目的とする。

二　対象資料と研究の方法

対象資料は以下である。[2]

［片仮名文献］

A．寛永六年（一六二九年）『御書』

B．元禄二年（一六八九年）刊『眞字寂寞草』

C．元禄八年（一六九五年）刊『真名百人一首』

D．明和六年（一七六九年）板『伊勢物語』上下巻

［平仮名文献］

E．寛永二〇年（一六四三年）板『伊勢物語』

F．明和六年（一七六九年）板『伊勢物語』考異

G．弘化三年（一八四六年）刊『百人一首』

本稿の片仮名の仮名遣いの調査対象として真名本と、漢字片仮名交じり文を扱う。真名本は振り仮名として全文の仮名表記を見ることが出来る。

それに対して、漢字仮名交じり文では、助詞や活用語尾を中心に片仮名が用いられる。用言の語幹など仮名遣いの調査対象が、漢字で表記されるため、それらの仮名遣いを知ることができない。

よって、調査対象の多くを漢字片仮名交じり文の書ではなく、真名本とする。ただし、漢字片仮名交じり文であるAや漢字平仮名交じり文であるGは、漢字に必ず振り仮名が附されているため、調査対象に定めた。

画像は、明和六年板『伊勢物語』上下巻の巻頭の一部分である。

調査対象が本稿においてどのように位置づけられるのかを、表1に

まとめた。丸括弧内には書写年を記す。

表1　調査対象一覧表

	『和字正濫鈔』成立以前	『和字正濫鈔』成立以後
片仮名が用いられている文献	A寛永六年『御書』（一六二九） B元禄二年刊『眞字寂寞草』（一六八九）	C元禄八年刊『真名百人一首』（一六九五） D明和六年板『伊勢物語』上下巻（一七六九）
平仮名が用いられている文献	E寛永二〇年板『伊勢物語』（一六四三）	F明和六年板『伊勢物語』考異（一七六九） G弘化三年刊『百人一首』（一八四六）

研究の方法としては、調査対象の本文を単語毎に区切り、歴史的仮名遣い、定家仮名遣い、他の調査対象文献との比較を行う。[3] また、『和字正濫鈔』との一致率を調査する。その上で、平仮名の仮名遣いと片仮名の仮名遣いとの比較を行う。

三　『和字正濫鈔』と調査対象文献の仮名遣い

調査資料における延べ語数に対する『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いの語の割合を表2に示した。[4]

表2　『和字正濫鈔』と異なる語

		作品名	延べ語数	異なる仮名遣い【延べ】	異なる仮名遣い【異なり】	割合
片仮名文献	成立以前	A	2015	18	11	0.9
		B	2795	80	38	2.9
	成立以後	C	1651	17	8	1
		D	12366	3	3	0.002
平仮名文献	成立以前	E	2444	40	8	1.6
	成立以後	F	864	3	3	0.3
		G	1651	18	5	1

『和字正濫鈔』成立以前に成立したBの延べ語数の割合は二・九％、Eの割合は一・六％である。このことから、『和字正濫鈔』成立以後に成立した作品C・D・F・Gよりも『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いである語が多いことがわかる。しかし、『和字正濫鈔』の五〇年以上前に書写されたAは、延べ語数の割合が〇・九％と『和字正濫鈔』に沿う語が多い。この割合は、『和字正濫鈔』成立以後の作品の割合に近い。これは、Aが他の調査対象とは異なるジャンルの作品であり、書かれた文脈が異なることが関係しているのではないだろうか。

Bでは『和字正濫鈔』では〈お〉で表記される語が〈を〉で表記されている。[5][6] そのため、Bの延べ語数の割合は、二・九％と今回の調査委文献の中で最も高い。これは、Aには見られない仮名遣いである。

AとBから、『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の文献の仮名遣いは、書き手が持つ仮名遣い意識に任されている可能性がある。

また、今野真二（二〇一四）によると、『和字正濫鈔』は同時代の仮名遣いには影響を与えなかったとされている。しかし、A・BとC・D、EとF・Gの割合を見ると、片仮名・平仮名両者の仮名遣いに『和字正濫鈔』成立前後で変化が見られる。

DとFという同一本内においても、仮名遣いが異なる語の出現率は、〇・〇〇二％と〇・三％と異なる。さらに、『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いの語の用例も異なる。Dの『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いの語は、【陰陽師】【乾く】【声】であり、Fの『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いの語は【萎る】【川】【参る】である。Fでは「まいる」という『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いが見られるが、Dでは「マヰル」という仮名遣いになっている。これは、片仮名の仮名遣いと平仮名の仮名遣いの意識が異なる可能性を示唆しているのではないだろうか。

四　定家仮名遣いと調査対象文献の仮名遣い

『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いが見られた語の中で、定家仮名遣いに沿った仮名遣いが行われている語の割合を表3に示した。[7]『駒澤大学　国語研究　資料第二　假名文字遣』（一九八〇）に記載の無い語も多く存在しており、表3の対象語は記載があった語に限定している。

表3　『和字正濫鈔』と異なる語の中で定家仮名遣いに沿う語

		作品名	全対象語	延べ語数	異なり語数
片仮名文献	成立以前	A	11	10(90.9)	4(80)
		B	33	9(27)	9(39.1)
	成立以後	C	6	6(100)	3(100)
		D	0	0	0
平仮名文献	成立以前	E	33	32(97)	4(80)
	成立以後	F	2	1(50)	1(50)
		G	0	0	0

『和字正濫鈔』成立直後に成立したCが一〇〇％という割合になった。異なり語数が三語と用例は少ないものの、定家仮名遣いの影響を残しているといえるだろう。

Dの『和字正濫鈔』に沿っていない語は、定家仮名遣いにおいて言及が行われていない語であった。Dの仮名遣いは、『和字正濫鈔』に沿うだけではなく、定家仮名遣いにも沿っているといえる。それに対して、Fは定家仮名遣いにも沿わない仮名遣いが一語見られる。これは、前述したように同一本内でも片仮名と平仮名の仮名遣いが異なる可能

性を示している。

Gは、『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いを行っている語の全てが、定家仮名遣いとも異なる仮名遣いをしている語であった。その理由としては、Gの成立が『和字正濫鈔』成立後一五〇年以上経過していることが挙げられる。

また、『和字正濫鈔』成立以前の調査対象であるA・B・Eの『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いをしている語の中には、定家仮名遣いに沿った語が見られる。その中でも、Bは、延べ語数の割合が二七％、異なり語数の割合が三九．一％と低い。このことから、『和字正濫鈔』とも定家仮名遣いとも異なる独自の仮名遣い意識を持っていたことがわかる。表3におけるA・Eは、延べ語数の割合は九割程度、異なり語数が八割とかなり高い。

このことから、『和字正濫鈔』成立以前の仮名遣いにおいては、『和字正濫鈔』に沿わない場合は定家仮名遣いに沿っていたといえる。

五　仮名ごとの検討

1．〈お〉と〈を〉

『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いの語を検討すると、特に〈お〉と〈を〉の仮名遣いに関する語が多い。『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いの語の中で、『和字正濫鈔』では〈お〉で表記される語が、〈を〉で表記される語の数と割合を表4に示した。(8)

表4　〈お〉から〈を〉への置き換えが見られた語

		作品名	全対象語	延べ語数	異なり語数
片仮名文献	成立以前	A	17	11(64.7)	7(58.3)
		B	79	44(55.7)	31(83.8)
	成立以後	C	17	5(29.4)	2(25)
		D	3	1(33.3)	1(33.3)
平仮名文献	成立以前	E	40	2(5)	2(25)
	成立以後	F	3	0	0
		G	18	1(5.6)	1(20)

平仮名と片仮名、更に『和字正濫鈔』という境界線を引いた場合、明確な違いがあることがわかった。

『和字正濫鈔』成立以前のA・Bの延べ語数の割合は、Aが六四．七％、Bが五五．七％と他の対象文献より割合が高い。A・B同様に『和字正濫鈔』成立以前に成立しているEの割合は、成立以後のF・Gより少なく、A・Bとは異なる。

このことから、『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の仮名遣いと平仮名の仮名遣いが異なることがわかる。

また、A・BとC・Dを比較すると、C・Dの方が、延べ語数の割合が低いことがわかる。その理由として、一〇〇〇年頃から〈お〉と

〈を〉の表音上の違いは失われていたことが挙げられる。以上のことから、『和字正濫鈔』成立以前の片仮名本A・Bでは、平仮名文献よりも、表音に沿った仮名遣いが行われていた可能性があるといえる。そして、『和字正濫鈔』成立以後、〈お〉と〈を〉の仮名遣いの統一が行われたことも示している。

EとF・Gで比較を行うと、割合がほとんど変化しないことが分かる。これは、『和字正濫鈔』成立前後で〈お〉と〈を〉の平仮名の仮名遣いがほとんど変化していないといえる。

実際には、各文献では〈お〉と〈を〉はどのように用いられているのだろうか。複数の調査対象に見られた語を抽出し、考察を行う。

【置く】(『和字正濫鈔では〔おく〕』)

A…用例無し
B「ヲク」…全一例
C「ヲク」…全三例
D「オク」…全八例
E「をく」…全二例
F…用例無し
G「おく」…全三例

『和字正濫鈔』とは異なる仮名遣いである〔をく〕という仮名遣いを行っているのは、B・C・Eの三つであった。これは、『和字正濫鈔』成立以前の平仮名の仮名遣い、片仮名の仮名遣いにおいては、〔をく〕という仮名遣いが行われていたという事を示している。Cは、『和字正濫鈔』の二年後に成立しているため、【置く】という語に関しては仮名遣いの意識が及んでいなかったと考えられる。

【折る】(『和字正濫鈔』では〔をる〕)

A…用例無し
B「ヲル」…全一例
C「オル」…全二例
D「ヲル」…全四例
E…用例無し
F…用例無し
G「をる」…全二例

Cのみ〔おる〕が見られた。しかし、『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の仮名遣いであるBと、『和字正濫鈔』成立以後の片仮名の仮名遣いであるDは、〔をる〕であった。このことから、〔おる〕という仮名遣いは、C特有の仮名遣いであるといえる。また、【折る】の仮名遣いは、『和字正濫鈔』成立以前から〔をる〕であったと考えられる。

他にも、『和字正濫鈔』では〈お〉を用いる語が、〈お〉ではなく〈を〉を用いている語は存在した。特に、Bでのみ〈お〉ではなく〈を〉を用いている語が多かった。前述したように、Bの特異な仮名遣い意識が見える。

2．〈え〉と〈ゑ〉

【声】(『和字正濫鈔』では〔こゑ〕)

A「音」…全一例
B「コエ」…全二例
C「コエ」…全二例
D「コエ」…全一例／「コヱ」…全四例
E「こゑ」…全一例
G「こゑ」…全一例

〔こえ〕という表記が見られる調査対象は、AとBであった。よっ

て、『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の仮名遣いは〔こえ〕であると考えられる。

Dの〔こえ〕という表記は、〔こゑ〕が他に四例に見られることから、表記のぶれであると考えられる。CとDから、『和字正濫鈔』成立以後の写本では、『和字正濫鈔』に沿った〔こゑ〕という片仮名の仮名遣いが行われるようになったといえる。

また、E・Gで〔こゑ〕と表記されていることから、平仮名の仮名遣いにおいては『和字正濫鈔』成立以前から〔こゑ〕という表記が定着していた可能性が指摘できる。

各文献において、〈え〉と〈ゑ〉について『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いを行っている語は、【声】の他には存在しなかった。

六　本稿の成果

今回の研究で、以下の事がわかった。

㈠『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の仮名遣い、平仮名の仮名遣いにおいて、『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いを行っている語の仮名遣いは、定家仮名遣いと一致率が高い。

㈡『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の仮名遣いは、個々の著者の仮名遣い意識に任されている。

㈢『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の仮名遣いは、『和字正濫鈔』で〈お〉が用いられている仮名遣いの語が、〈を〉を用いた仮名遣いになっている場合が多い。

㈣『和字正濫鈔』成立以後の作品は、平仮名だけではなく、片仮名の仮名遣いも『和字正濫鈔』と一致率が高い。

『和字正濫鈔』成立以前の片仮名の仮名遣いは、各書写者の仮名遣い意識に任されていることがわかった。

これまで、『和字正濫鈔』成立は当時の仮名遣いには影響を与えなかったとされてきた。しかし、本稿の調査結果を見ると、平仮名の仮名遣いだけではなく、片仮名の仮名遣いにおいても、『和字正濫鈔』成立付近で変化していることがわかる。

また、片仮名の仮名遣いは表音的であり、平仮名の仮名遣いとは異なるとされてきた。しかし、『和字正濫鈔』成立以後の片仮名の仮名遣いは、平仮名の仮名遣いと完全には一致しないが、近いということがわかった。

以上のことから、近世前半期の今回の対象文献の中では、『和字正濫鈔』成立前後で片仮名の仮名遣いは変化していると言える。(9)

注

（1）管見の限りでは、中野真弓（一九九一年）が挙げられる。『法華百座聞書抄』、『方丈記』、『三帖和讃』を用い」て、「定家とほぼ同年代の片仮名文において「オ」と「ヲ」の仮名に定家仮名遣のような法則が存在したのかを考察してみたい」としている。「それぞれの資料から「お」「を」を含む語をすべて抜き出し三者に共通する語だけを選び」「分類し」、「考察を加えて」いる。『法華百座聞書抄』の「オ」「ヲ」の仮名の使い分けは、今のところアクセントによる使い分けとの接点は見出せないのであり、『法華百座聞書抄』の表記は当時の混乱した表記そのものであると考える。」「平安末期以後、院政時代から鎌倉時代における片仮名文の世界も音韻上の混乱を背景に、何らかの仮名遣の基準が求められ、そして、平仮名の世界でいわゆる定家仮名遣いが生まれたように『方丈記』では「ヲ」表記、『三帖和讃』では「オ」表記と、それぞれの基準のもとに意図的に書き分けたのではないだろうか。」としている。

（2）明和六年刊『真名本伊勢物語』は、真名本である本文上下巻と漢字平仮

名交じり文で書かれた考異とで構成されている。そのため、上下巻と考異を別に扱うものとする。さらに、本稿、調査対象の比較によって仮名遣いを見出すことを目的としたため、調査対象をできるだけ多く設定する都合上、本文全体を対象としていない調査対象がある。『寛永二〇年板本』は二九頁八行目まで、元禄二年刊『眞字寂莫草』は二〇頁一八行目まで、『御書』は一六丁裏六行目までを対象とした。

（3）『和字正濫鈔』の仮名遣いは『学研全訳古語辞典』を、定家仮名遣いは『駒澤大学　国語研究　資料第二　假名文字遣』によった。

（4）表2における「延べ語数」とは、対象資料の全用例数のことである。「割合」とは、異なる仮名遣いの延べ語数を、調査対象の延べ語数で割り、％で表記したものである。

（5）Bの対象範囲内で、『和字正濫鈔』において〈オ〉の仮名遣いが〈ヲ〉で表記されている用例は以下三一例である。「ヲホシ」「ヲホセラル」「ヲホセ」「ヲモフ」「ヲトル」「ヲス」「ヲロソカナリ」「ヲク」「ヲクル」「ヲユ」「ヲロカナリ」「ヲハス」「ヲモシロシ」「ヲナジ」「ヲボユ」「ヲホヤケ」「ヲホカタ」「ヲオチ」「ヲンクラヰ」「ヲンアリサマ」「ヲヤ」「ヲロス」「ヲト丶」「ヲキナ」「ヲシハカル」「ヲソロシ」「ヲノレ」「ヲゴル」「ヲボツカナシ」「ヲト」「イヲ」

（6）〈〉には、平仮名、片仮名問わない仮名を、【】には、該当語に通用の漢字を当てたものを、「」には、調査文献で実際に出現した仮名遣いを、〔〕仮名遣いを入れる。

（7）表3における「全対象語」は、『和字正濫鈔』と異なりが見られた語の中で、『假名文字遣』に記載されていた語を示す。「延べ語数」は、「全対象語」の中で定家仮名遣いに沿っていた語の延べ語数を示す。「異なり語数」は、「延べ語数」と同様の事を指す。丸括弧内に、それぞれの数値を「全対象語」で割った数を示す。

（8）「全対象語」は、『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いを行っていた語のことを指す。「延べ語数」は、『和字正濫鈔』と異なる仮名遣いである語の中で、〈お〉ではなく〈を〉で表記されていた語の延べ語数を指す。「異なり語数」は「延べ語数」と同様のことを指す。丸括弧内に、それぞれの数値を「全対象語」で割った数を示す。

（9）今回の真名本以外にも対象を広げ、検討を行う必要がある。

参考引用文献および参考ＵＲＬ

・池田亀鑑　『伊勢物語に就きての研究』　有精堂出版　一九三四年九月
・川瀬一馬　『龍門文庫善本書目』　阪本龍門文庫　一九七三年三月
・金田一春彦　『学研全訳古語辞典　改訂第二版』　学研教育出版　二〇一四年一月
・國領麻美　「寛永二十年板真名伊勢物語の本文の性格及び変字法に就いて」『真名本伊勢物語―本文と索引―』　二〇〇〇年三月　新典社
・小林芳規　「中世片仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』三〇号（特輯号三）　広島大学文学部　一九七一年三月
・小松英雄　『日本語書記史原論　補訂版　新装版』　笹間書院　二〇〇六年五月
・今野真二　『かなづかいの歴史　日本語を書くと云うこと』　中央公論新社　二〇一四年二月
・林美朗　「真名本伊勢物語諸本研究の系統分類に関して」『国語国文研究』第八六号　北海道大学国文学会　一九九〇年九月
・樋野幸男　「〈有標の仮名〉として機能する仮名」『東海学園女子短期大学国語国文』四七号　東海学園女子短期大学国語国文学会　一九九五年三月
・樋野幸男　「片仮名文における〈有標の字母〉の提唱―および有標的効果の基盤―」名古屋大学国語国文学第六七号　一九九〇年十二月

・中野真弓　「中世片仮名文における「オ」「ヲ」の仮名遣いについて―『法華百座聞書鈔』『方丈記』『三帖和讃』―」『尾道短期大学国文学会』三四号　尾道短期大学国文学学会　一九九一年三月
・木村晟・瀬尾邦雄・柳田忠則　『真名本　伊勢物語　綾足校訂』　翰林書房　一九九五年五月
・高橋忠彦・高橋久子　『新典社索引叢書13　真名本伊勢物語　本文と索引』　新典社　二〇〇〇年三月
・山田巌・大友信一・木村晟　『駒澤大学　国語研究　資料第二　假名文字遣』　汲古書院　一九八〇年六月
・『百人一首』国立公文書館デジタルアーカイブ　https://www.digital.archives.go.jp/　二〇一九年一月三〇日閲覧
・『眞字寂寞草』新日本子典籍総合データベース　https://kotenseki.nijl.ac.jp/　二〇一九年一月三〇日閲覧
・『真名百人一首』新日本子典籍総合データベース　https://kotenseki.nijl.ac.jp/　二〇一九年一月三〇日閲覧

付記

阪本龍門文庫蔵の原本を拝見する機会を与えていただいた。公益財団法人阪本龍門文庫の皆様に、心より御礼申し上げます。

（広島大学大学院博士課程前期一年）